

新型コロナウイルスが暴いた近代都市計画の終焉
後藤春彦 早稲田大学理工学術院教授（苗S 55・院S 57・博S 62）

第一次世界大戦中の1918年、スペイン風邪によるパンデミックが世界を襲った。わが国では、1919年の第二波、1920年の第三波を通じて、患者数は2380万人以上、死者数は388、727人を数えた。時を同じくして、1920年、目的に『交通、衛生、治安、経済』を掲げる旧都市計画法が施行された。そして、百年後の現在、新型コロナウイルスによるパンデミックを再び経験している。1969年の都市計画法（新法）施行からも50年が経過しており、社会経済情勢の変化に対応した都市計画法の抜本的改正を議論するべき時期を迎えている。

新型コロナウイルスは、今後の都市や地域にも大きな影響を与えるだろう。私は、この問題について、「密度」、「モビリティ」、「テレワーク」をキーワードに議論している。

「密度」は近代都市計画における重要な尺度のひとつで、都市問題の解消をめざし様々な規制を駆使して密度を制御してきた。一方、選択と集中により密度をある程度高めるように誘導することが効率の良い都市をつくることも考えられた。さらに、新自由主義にもとづく都市再生では密度に対する規制の緩和が民活導入のインセンティブになった。その結果、場所の文脈とはかけ離れた既視感のたぐや都市景観が世界の随所に転写されていった。

かつて、アテネ憲章（1933年）は『住居、仕事、レクリエーション、交通』を都市の機能に掲げた。近代都市計画は、ゾーニングによって住居、仕事、レクリエーションの機能を区分し、それを交通で結ぶことによりダイナミズムを生み、『通勤』という「モビリティ」に依拠したライフスタイルの獲得により都市の拡張を可能とした。しかし、新型コロナウイルスは「モビリティ」によって感染拡大し、三密により感染はクラスター化し、ロックダウンに陥った各国の都市は、「密度」と「モビリティ」を失い、都市そのものが消滅したかのような状況におかれた。この間、『通勤』に代わり情報技術の支援による「テレワーク」が活用されるに至り、新型コロナウイルス感染症終息後の社会における働き方の選択肢をひろげている。

今日、私たちは物理的な形を伴わない、いわば「無形の都市」の誕生に立ち会っているのではないか。ユビキタスに存在する「無形の都市」には密度の規制／緩和という従来の都市計画の操作概念は意味を持たなくなっている。

かつて20世紀は「都市の時代」ともてはやされた。巨大都市は近代の大発明であり、世界経済を力強く牽引し、スペイン風邪の流行や旧都市計画法が施行された百年前に比べて、わが国の人口は倍増した。しかし、新型コロナウイルスによって、この発展モデルは見事に打ち砕かれた。今、私たちは百年続いた近代都市計画の終焉に立ち会っているのだ。

早稲田建築

NEWS No.111
APRIL 2021

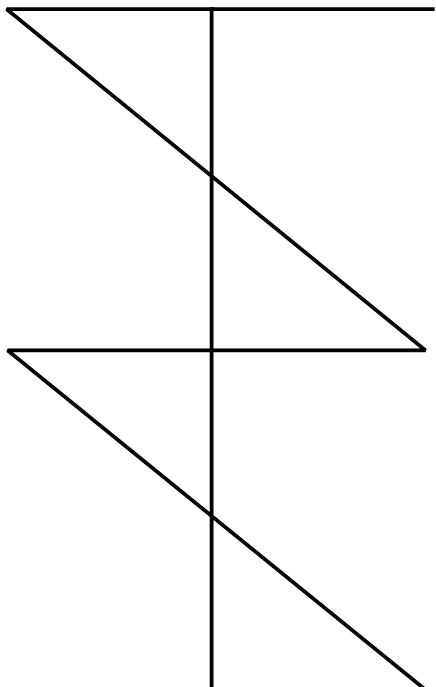
- 一 ―― (巻頭言) 新型コロナウイルスが暴いた近代都市計画の終焉 ―― 後藤春彦
- 二―三 ―― (特集) 早稲田大学歴史館企画展示「今に思ひく早稲田建築」7月30日(金)まで ―― 尾崎健夫・田名網雅人
- 四―五 ―― (稲門の風 十四) コロナ禍における3つの確し：コロナ後の建築界に新たな戦略を考えるシンポジウム、いま場づくりを問う国際Zoom集会―近畿支部、ミニ・ギャラリー#001―若手研究者による発信の場
- 六―七 ―― OBOGによる仕事紹介・第二回職域幹事会／「建築展」報告・「芸術展」報告
- 八 ―― 春の大会と案内／合同クラス会予告／早稲田建築アーカイブス完成／主な会務報告／訃報ほか

早稲田大学歴史館企画展示

「今に息づく早稲田建築」 7月30日(金)まで

早稲田大学本部キャンパス1号館1階に早稲田大学歴史館と称するスペースが開設されている。ここでは過去における膨大な大学の学術資産や人的資産の蓄積だけに留まらず、現在や未来の教育、研究、社会貢献等に関する早稲田大学の全貌を一堂に展示し、学内外に広く公開されている。そして、目下、当館では企画展示ルームにおいて建築学科のこれまでの歴史を紹介した展示が公開されている。

特集では元早稲田大学文化推進部の尾崎健夫氏に寄稿を、そして早稲田建築アーカイブス実行委員長の田名網雅人氏に話をうかがった。



過去・現在・未来をつなぐミュージアム

——早稲田大学歴史館について

本学は、創立150年となる2032年に向けて「Masada Vision 150」を策定した。その核心戦略の一つである「早稲田らしさと誇りの醸成をめざして」のもとに、大学ではキャンパスそのもののミュージアム化を推進した。

早稲田キャンパスには、本年、創設90年余となる坪内博士記念演劇博物館、同じく20年余の會津八一記念博物館に加えて、大隈記念講堂をはじめとする歴史的建造物群や、点在する彫像・記念碑など、数々の文化資源が存在する。キャンパスを訪れ、これと向き合う人々の誰もが、時空を超えてその価値を体感できることは、キャンパスそのものがミュージアムになりつつあると云ってよいのではないだろうか。

早稲田大学歴史館の入る建物(1号館)は、キャンパス整備における歴史継承ゾーンに位置付けられ、1935(昭和10)年竣工の歴史的建造物の一つである。正面入口の円柱は、明治期の正門であった門柱を加工したものであり、戦果に耐え、早稲田大学草創期の息吹を今日に伝える当館の象徴ともなっている。

当館は平成30年3月20日に開館したが、その展示物や資料を通じて、過去のみならず現在、未来へとつながる思いを込めて、館名の英訳も「History for Tomorrow」 Museumである。

尾崎健夫(元早稲田大学文化推進部文化企画課/苗S4)

企画展示「今に息づく早稲田建築」では、コの字形に囲まれた壁3面を利用して写真、映像、先達ゆかりの品々などを展示する。それらの多くは、稲門建築会が公開する「早稲田建築アーカイブス」がベースとなった。早稲田建築アーカイブス実行委員長を務めた田名網雅人さんに、展示の狙いや経緯を振り返っていただいた。

早稲田大学歴史館では学部・学科のみならず、様々な分野の卒業生の人物群像を紹介する展示をしており、建築学科は政治経済学部、文学部に続く第3弾となる。本学を訪れる父兄に早稲田の歴史を知っていただくのが主な目的だ。

展示の企画は、早稲田建築アーカイブス実行委員会が担うことになった。アーカイブスでは、構造や設備を含めて早稲田建築の関係者を総合的に紹介しようという選定基準に基づき60人の映像を紹介してきた。今回もこの基準に則して企画することとした。

展示コーナーの一つに、関係者ゆかりの品を並べたガラスケースがある。村野藤吾、吉阪隆正、菊竹清訓、池原義郎諸先生のスケッチ類をはじめ、建築設備技術遺産の第1号となった井上宇市先生の建築設備ポケットブック、松井源吾先生愛用の計算尺、元鹿島副社長の二階盛さんが超高層ビルの施工についてまとめた学位論文などを展示している。

村野先生による新高輪プリンスホテルの最初のエスキースケッチは、以前雑誌で見て強い印象を受けたのを覚えている。今回、森義純さん(苗S45)から原画を高橋志保さん(苗S34)が所有されている。

るとお聞きし、借用することができた。

展示品の収集には、他にも多くの方々の協力を得た。例えば、ちょうど同じ時期に竹中工務店が広報誌『approach』(2020年春号)で「松井源吾―美と構造のアナロジー」を企画していた。そこで同社の担当者とも連携して松井先生の資料を集め、一部の資料をお借りした。計算尺は、先生の御親族が新潟県の佐渡に里帰りした時に見つけ出したものだ。

こうした過程では、アーカイブス制作で築いた人脈や経験が大いに役立った。展示には関係者の許諾が必要となる。誰に連絡すべきかをアーカイブス制作時に記録していたので、今回はそれに基づいて進めれば良かった。

展示の企画を経て、改めて感じたのは早稲田のパワーだ。100年を超える歴史を通して早稲田建築が幅広い分野に人材を輩出してきたことを再認識する機会となった。唯一残念なのは、コロナ禍のため多くの来場者を見込めないことだ。展示は7月30日(金)まで続くので、ぜひ足をお運びいただきたい。(談、2021年1月7日)

田名網雅人(早稲田建築アーカイブス実行委員長/苗S55)

●展示内容

- ・ 建築家ら32人のプロフィール紹介・大画面タッチパネル
- ・ 古谷誠章教授の紹介文「早稲田建築の群像」
- ・ 24作品の写真でつづる「早稲田建築：探訪」パネル
- ・ 建築家のスケッチなどの実物展示
- ・ 早稲田建築アーカイブス60人のスクロール映像
- ・ 稲門卒業生・教員が設計したキャンパス内建築の紹介パネル



右上より…本部キャンパス1号館、歴史館エントランス。企画展示全景。
建築家のスケッチなどの実物展示。手前に松井源吾先生愛用の計算尺。

コロナ禍における3つの催し

- ・コロナ後の建築界に新たな戦略を考えるシンポジウム
- ・いま場づくりを問う国際Zoom集会―近畿支部
- ・ミニ・ギャラリー#001―若手研究者による発信の場

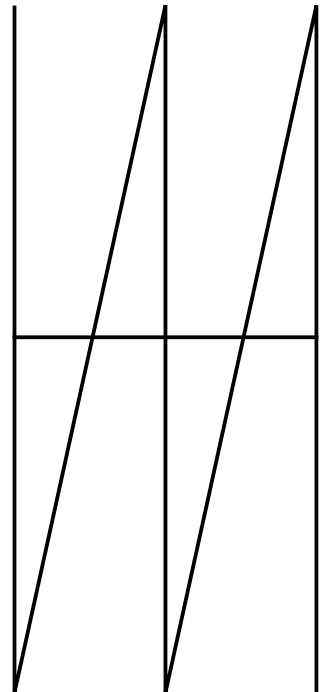
2020年は、稲門建築会の催しにとっても試される1年となりました。例年開催される合同クラス会の中止をはじめ、「集まる」ことができない状況は、今までは想像できなかったような制約を生みました。しかし、制約の



写真右から…
 コロナ後の建築界に新たな戦略を考えるシンポジウム会場風景。
 国際Zoom集会、吉良氏、塩浦氏、早野氏のプレゼンより。

コロナ後の建築界に新たな戦略を考えるシンポジウム

昨年11月7日土曜日、通常であれば文化祭、理工展とともに行われる稲門建築会合同クラス会が、コロナ禍のため中止を余儀なくされたことを受け、学内、建築業界各方面の早稲田出身の下記重鎮の方々に57号館201階段教室にお集まりいただき、「コロナ



後の建築界に新たな戦略を考えるシンポジウム」と題し、ウィズコロナ、アフターコロナについて幅広く議論いただきました。
 シンポジウムは、大内会長の開催主旨説明に始まり、各パネラーからそれぞれのプロフェッション、分野の観点からウィズコロナ、アフターコロナについて、パワーポイントを交えてのお話をいただき、パネラー相互のディスカッション形式の意見交換を含め、トータル120分のWeb討論会となりました。コロナ感染に配慮し、当日会場には登壇者を含むシンポジウム関係者のみにお集まりいただいたため、無観客試合の様相を呈していましたが、稲門建築会員のWeb視聴者は総勢約180人に及び、シンポジウムは非常に熱のある内容になりました。またこの模様は稲門建築会以外の方々もご覧いただけるよう、YouTubeで撮影画面を含む会場風景・音声を同時配信しました。YouTubeの録画映

像は、稲門建築会の会員の方々のみ稲門建築会ホームページより視聴いただけるシステムを検討中ですが、視聴ご希望の方は、稲門建築会事務局にご連絡いただければYouTubeのアドレスをお送りします。見逃された方はぜひご利用ください。
 浅見邦一(事業委員会/苗S62)

●パネラー
 三井不動産 北原義一副社長(早大政経S55)
 「アフターコロナの社会について」
 新型コロナウイルス流行によって「3密回避」をはじめ様々な制約が求められる中で、いかに社会が本来求める「人と人の直接的関わり」を取り戻すことができるかについて、「都市の免疫力」の観点から解説
 日建設計 亀井忠夫社長(苗S52)
 「Design with and after COVID-19」
 「W350」・「キャン・ノウ」など、日建設計が手掛ける最新プロジェクトを交えながら、新型コロナウイルス流行後の価値観変容によって建築・都市・そして設計者に求められるものについて考察
 早稲田大学 古谷誠章教授(苗S53)
 「新型コロナで思ふ出すこと」
 星新一のショートショート作品、C・W・ニコルさんとの思い出なども交えながら、新型コロナウイルス流行が炙り出した地球・暮らし・コミュニティの現状と、アフターコロナの展望について、広い視点から建築家の立場で解説
 早稲田大学 後藤春彦教授(苗S55)
 「コロナ後の都市計画の展望」
 新型コロナウイルスの流行により、近代都市計画は終焉を迎えた、という指摘から、「密度」「モビリティ」「テレワーク」そして、「空間計画」「医学を基礎とするまちづくり(MBT)」などをキーワードに、コロナ後の都市計画について論考
 早稲田大学 田辺新一教授(苗S57)
 「建築環境・設備から」
 新型コロナウイルス感染症対策について、感染メカニズムとともに環境・設備からの知見の解説と、アフターコロナの展望として求められる脱炭素社会の在り

方・国内外の先端コンセプトについて紹介
 梓設計 杉谷文彦社長(苗S55)
 「Next Stadium & Arena」
 「集まる」空間の代名詞でもあったスタジアムとアリーナについて、スポーツ・エンタメ業界の変容と併せて「Benefit」「Safety」「Community」の視点から、今後の施設デザインに求められることについて解説
 観光企画設計社 鈴木裕社長(苗S48)
 「ウィズコロナ時代のホスピタリティ空間」
 ホスピタリティ施設の近年の動向を、国内外の実例を用いて紹介。さらに、アフターコロナのヴィジョンとして「町じゅう旅館・町じゅうホテル」プロジェクトによる地域再生プランについて考察
 長谷工コーポレーション 池上一夫社長(苗S55)
 「集合住宅の動向」
 新型コロナウイルスによる働き方・暮らし方の変化について、アンケートを基にした洞察から、「テレワーク対応」「在宅時間の充実」「感染防止対策」「デジタル技術の浸透」をキーワードとした「ニューノーマル対応集合住宅」について紹介
 ●司会進行
 鹿島建設 田名網雅人(苗S55)
 パネラー発表の概要(文責・風間健)



いま場づくりを問う国際Zoom集会 (近畿支部+北京、 デルフト、東京)

例年、近畿支部では支部総会

「交流の夕べ」を開催しておりま
した。本年はコロナ禍を好機と
とらえ、「近畿」や「稲門」「国境」
も超えて参加し、自由闊達に議論
できるリモートによる「交流の
夕べ」開催というアイデアが生
まれ、シンポジウム『世界から地
域から、いま、場づくりを問う』
in Zoomを開催することとなり
ました。

●講師 吉良森子 (苗S 62)

塩浦政也 (苗H 09)

早野洋介 (芽H 13)

●司会 倉方俊輔 (苗H 16)

最初の登壇者である吉良森子
氏は、在学中に、デルフト工科大
学へ留学し、ベン・ファン・ベル
ケル建築事務所勤務の後、アム
ステルダムに建築事務所を設立
しました。オランダでは住宅・
国土開発・環境省勤務、アムステ
ルダム市美観委員として活躍さ
れました。

講演はクローズドグループ
という小さな町におけるコミュニ
ニティー形成の仕事を中心にお
話いただきました。かつて修
道院であった老人ホームを中心

としたコミュニティが、障がい
者グループホームに転換してゆ
くプロセスを、地元のNPOの
方々と協力しサポートをしたお
話でした。オランダの堅い都市計
画コードの中で、どうやったら人
びとの場が創れるかと、参加によ
る場づくりの意義を学びました。

塩浦政也氏は、大学院を卒業
後、日建設計に勤務し、東京ス
カイリータウン等の設計を担
当、Nikken Activity Design
Labを経て、株式会社SCAPE
を設立し「22世紀の景色(=SCAPE)を作る」ことをテーマ
に、建築家の活動領域を拡張する
活動を開始しました。

講演は、「22世紀の景色 人間
を中心に据えた場を生成する」
というコンセプトのもと、ワーク
スタイルデザイナー、チーフデザ
インオフィサー、パブリックス
ペースや実験的空間の実装者、な
ど様々なポジションで場づくり
をこれからはじめようとしてい
る塩浦政也氏の活動の一端をご
紹介いただきました。

最後の登壇者である早野洋介
氏は、早稲田大学で材料工学、芸
術学校で建築を学んだ後、ロンド
ンのAAスクールで修士号を取
得しました。その後、ロンドンの
ザハ・ハデイド事務所に所属し、
北京SOHOのプロジェクトなど
を手がけた後、同僚のマ・ヤンソ
ン氏、ダン・チェン氏とともに

MAD Architects を設立し、設
計活動を展開しています。

MAD Architects は東洋的自
然観に基づく造形を通じて、現代に
おける都市と建築の在り方を提
案した様々なプロジェクトを実
践しており、講演は、これらのプ
ロジェクトである西湖十景やハ
ルビンオペラハウス、越後妻有な
どの解説を中心にお話しいた
されました。とくに新潟=越後妻
有の大地の芸術祭で、古いトネ
ルをリノベーションして、溪谷へ
の劇的なゲートを創った作品に
感動させられました。

以降司会者コメントと聴
衆を含んでZoom意見交換で盛
り上がりしました。
こうして講師の方々のグロー
バルで多様な活躍を聞けたこと
は、場所や時間の制約を超えたり
モートによる活動の可能性を見
出せるよい機会になりました。参
加者も、近畿・稲門に加え全国や
世界からの参加を得られました。
楨本光展(近畿支部/苗S 63)

ミニ・ギャラリー #001 若手研究者 による発信の場

●講師 尾方壮行(東京都立大学都
市環境学部建築学科助教/苗H 24)
「漂う飛沫はどこへいく/今、感
染制御の現場から」

早稲田大学若手の研究者や、会
員の先駆的な取り組みや情報、活動
を広く社会に発信できる場を設
けられないか。そのような場を
ミニ・ギャラリーと称し、まだコ
ロナの字も出ていなかった
2020年初頭から企画を立ち
上げ、場所探しを検討していたう
ちに、リアルな空間をコロナが占
拠、大学も封鎖され、稲門建築会
の活動自体がままならぬ状況に
陥りました。事業委員会の活動
も、Web空間でできることを、
失敗を恐れず始めていこうじゃ
ないかということになり、ミニ・
ギャラリーも当初のリアル空間
からオンライン配信に舵を切っ
てやってみることにしました。

その記念すべき第1回ミニ・
ギャラリーは、10月28日、田辺研
究室出身で、現在は東京都立大
学都市環境学部建築学科の助教
として、室内環境における感染
対策、室内環境質と建築物エネ
ルギー消費量などの研究に取り組
みながら、空気調和・衛生工学会
新型コロナウイルス対策特別委
員会で活躍中の尾方壮行(おが
た・まさゆき)氏(1990年
生まれ)をお招きし、「漂う飛沫
はどこへいく/今、感染制御の現
場から」のタイトルでお話して
いただきました。

究されてきたとのことで、(新型
コロナウイルス感染症の)飛沫・
空気感染対策におけるマスク着
用、換気設備の役割、意義につ
いて大変わかりやすく説明いた
されました。また、ウイルスを含
んだ粒子の大きさが、飛沫から空気
(感染)へ向けてグラデーション
的な物理形状であること、空気感
染については、従来の常識に基
いて過剰な予防戦略がとられ現
場が逼迫する恐れがあるため、一
般的な空気感染症と新型コロナウイルス
の違いにおける空気感染の違
いについて慎重なコミュニケーション
が必要であること、それ
に対する研究者としての厳格な発
言に尾方さんの研究に取り組む
姿勢と、建築と医療に関する言葉
の扱いに違いがあることがとて
も印象に残りました。

急な告知にも関わらず、参加応
募者55人、当日は約40人の方がリ
アルタイムでオンライン参加い
ただきました。アンケートでは、
通信環境の不具合、特に音声の聞
き取りづらい部分があったとの
コメントをいただきました。手
探りで始めたWebミニ・ギャ
ラリー第1回ですが、技術的な改
善はもちろん、参加者との双方向
性についても改善を図って参
りますので、次回、多くの方に参加
いただければと思います。
浅見邦一(事業委員会/苗S 62)、
加藤詞史(同/苗H 01)

OBOGによる仕事紹介 第二回職域幹事・新年会

●2020年度「OBOG」による仕事紹介」報告

稲門建築会OBOGと学生の皆さんが語り合う場の提供をテーマに「OBOG」による仕事紹介」が11月28日に開催されました。今年度はコロナ禍のためWeb会議システムを活用したオンラインでの開催となりました。初めての取組みで至らない点もありましたが、皆様のおかげで有意義な場とすることができました。

●2020年度「第2回職域幹事会・新年会」報告

第2回稲門建築会職域幹事会が1月29日にオンラインにて開催されました。34名の職域幹事と、約30名の先生と稲門建築会理事・委員が出席し、大内政男会長からご挨拶をいただいた後、20年度の活動状況報告を各委員長より行いました。コロナ禍においても、各委員会が工夫して活動を継続できていることが、皆様にもご理解いただけたと思います。

第1部の「業種別仕事紹介」では、15業種・26社の方に事前には10分間のプレゼン動画を作成いただき、開催前の1週間の期間に学生が自由に閲覧できる形式を取りました。皆様の動画が力作揃いだったため、許可をいただいで学部1年生の「建築と社会」の授業に活用させていただくことになりました。このような学生に対する情報提供は、本来の稲門建築会の活動の姿であり、今後の活動にも展開していけると感じています。

また「OBOG」による仕事紹介」およびそのアンケート結果を報告させていただきました。今後さらに各委員会と共に各職域からご意見をいただき、オンラインによる活動の可能性を考えていきたいと思っています。

第2部の「企業別仕事紹介」では、30分の枠を11ルーム×15回分、合計で156枠を設けて開催しました。参加いただいた職

今年度の「仕事紹介」はコロナ禍での開催のために限定的な内容となりましたが、新しい稲門建築会の活動の可能性を考えるいい機会であったと感じました。またコロナ禍のマイナスをプラスに転じることも可能だと考えることができました。来年度の社会状況は分かりませんが、Web等を有効に活用して、更にグレードアップすることを考えていきたいと思っています。

写真上右から…52号館教室でのZoom運営風景、第3部懇親会にて後藤研4年制作希さんと田村祐太郎さんによるエール。

今年度開催できなかった合同クラス会については、田中智之実行委員長(苗H06)と高口洋人の開催を目指す旨の報告をいただきました。卒業後25年のOBOGのメンバーでの開催を継続させ、対面とオンラインのハイブリッドでの開催という新たな試みとして期待できます。最後に今年度建築学会の代議員・常議員の選挙に立候補されている稲門建築会OBOGからご挨拶いただきました。今後の稲門建築会活動の活発化のためにも結果を楽しみにしております。

写真下右から…長谷見雄二先生のミニ講演会、山田眞先生のミニ講演会、新年会締めくくりの一丁締め。

今回の第2回職域幹事会も第1回に続けてオンラインでの開催となったため、今年度は各職域幹事の方との議論や交流を対面で行うことはできませんでしたが、しかしながら、会員のオンラインリテラシーの向上により、色々な可能性を見出すことができ、この1年の大きな成果だと感じる会でした。

職域幹事会から継続して新年会を開催し、大内政男会長のご挨拶と乾杯で開宴しました。初めは約100名の出席者でスタートしましたが、ピーク時には135名、延べ人数として200名を超える方に参加いただき大賑わいでした。(実際はSilentですが…)

新年会では今年度退任される長谷見雄二先生と山田眞先生のお二人に講演をいただきました。先生方の早稲田らしい強い想いが感じられる話をお伺いすることができ、有意義な時間を過ごすことができました。

校歌斉唱・エールの後、亀井忠夫副会長と車戸城二副会長のお二人の挨拶で閉会となりました。オンラインでありながらも一体感を感じられた会となり、ご出席の方々にも満足いただけたのではないかと思います。

中田康将(会員委員会/苗H01)





建築展報告

2020年度の建築展は、新型コロナウイルスの影響により理工展への展示を見送ることとなりました。活動が制約されているなか、短い準備期間でのオンライン理工展に対応した実製作を「バー」と話し合い、このような対応といたしました。

理工展には参加することはできませんでしたが、1週間後から行われていた、早稲田大学社会学部卯月ゼミ主催の「Lights in Farm」せたがや光の芸術祭へ、建築展としての出展を行いました。世田谷区・野毛にある冬季利用されていないぶどう農園でのアート作品の屋外展示イベントで、実製作の場として最適であること、また、同じ早稲田大学の活動に関わることができるとなどを踏まえて、理工展では作品制作ができなかった分、こちらで活動を行いました。

展示では、土、木、金属、布、プラスチック、私たちの生活を囲む様々な素材たちを切り取り集め、一つの作品に仕上げました。「自粛」が唱えられる生活の中で、私たちは今まで以上に身の回りの生活風景に目を向けるようになっていきます。「あなたと

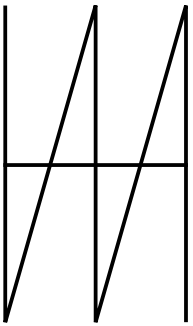
灯す、せたがやの暮らし」というイベント全体のテーマに合わせて、2020年の今ある暮らしを見つめ直す試みです。このほか、2021年2月現在、今年度の小さな活動をまとめた冊子を作成しておりますので、建築展のSNS等を通じて、発信したいと考えております。ありがとうございます。

永井颯馬（建築展代表／建築学科3年）

今年度の理工展は、11月7、8日にWebサイトとバーチャル理工展アプリを会場としたオンライン開催となりました。記事や事前に収録された動画、そしてライブ配信やZoomによって、オンラインで理工展の様々な催しものを体験することができました。コロナ禍の中の新たな試みが行われ、今後の建築展の可能性を探るきっかけにもなると思われまます。

中川優一（広報委員会）

写真右から…
「Lights in Farm」ぶどう棚のグリッドをモジュールに展示を構成。
子供たちには展示内を通り抜けながら楽しんでもらえた。
理工展、バーチャル理工展アプリのスクリーンショット。

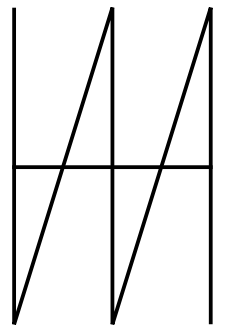


芸術展報告

例年の学園祭では、「芸術展」として、キャンパスにて課題作品展示を行い、学生の日頃の成果を会場いっぱい展示できる貴重な機会となっていた。今年度は、新型コロナウイルスの影響で春学期からオンライン授業となり、学園祭もオンラインで行われることとなった。日々、感染状況が変化する中で、初めてのオンライン学園祭にどのように出展するか、手探り状態で話し合いを重ねた。例年のように多くの方に作品を見てもらいたいという思いと同時に、オンラインだからこそできるコンテンツにこだわり企画を考えた。企画の大枠として、学生作品をプレゼンシートで公開、一部作品説明を動画で配信、講評会風景の動画を公開、という3つを軸に展開することに決めた。幸い、

学校内にWeb制作や動画制作の経験者がいたことから、外部に依頼することなく独自のコンテンツを制作することができた。

やむなく決まったオンライン開催ではあったが、例年では知ることができない気付きもあった。一つは、会場展示では模型がメインだが、オンラインでは図面やドローイングの詳細も掲載できることだ。媒体それぞれに伝わ



りやすい表現があることを実感できた。二つめには、学園祭以降もWebページとして残るという利点があり、今後の学生たちにとっても貴重な記録となる。三つめに、Webということで欧米など海外からも閲覧者があり、例年では想定できなかったような人にも見てもらえたことは嬉しい驚きだった。

データの取りまとめなど慣れない作業もあったが、芸術学校として展示の可能性を広げられたことは大きな収穫であった。コロナ禍という大変な状況のなか、稲田建築会の皆様、早稲田大学芸術学校の先生方、関係者の方々に温かいご支援、ご協力をいただき、オンライン開催という初めての試みを成功させることができたことに心から感謝している。一日も早く事態が収束し、会場展示もオンラインも自由に選ぶことができ、芸術展がより一層魅力的なものに発展していくことを願っている。

岡地織江（芸術展実行委員）

写真右3点…芸術展展示の図面やドローイング。
左…芸術展展示のオンライン講義会。



春の大会 ご案内

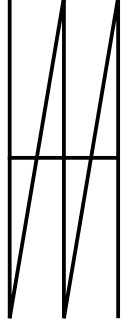
2021年度の春の大会（通常総会、特別講演、懇親会）ですが、今年5月28日（金）、西早稲田理工キャンパスにおいて開催することを予定しております。そして特別講演は、昨年コロナ禍のため中止を余儀なくされた、建築家・内藤廣先生と群馬県建設業協会会長・青柳剛先生お二人による特別講演を、順延という形であらためて実施する予定です。

内藤先生と青柳先生は建築学科の同期であり、ともに村野賞を受賞し、1976年に大学院修士課程を修了されています。卒業後、内藤先生（吉阪隆正研究室）はフェルナンド・イゲラス建築設計事務所（スペイン・マドリッド）、菊竹清訓建築設計事務所を経て、1981年に内藤廣建築設計事務所を設立、建築家としてご活躍されています。

青柳先生（穂積信夫研究室）は卒業後、自ら主宰した設計事務所での設計活動を経て、1981年家業の沼田土建株式会社を継がれ、2009年に群馬県建設業協会会長に就任、以来一貫して中小建設会社の健全な発展と社会的・技術的向上を目的とする活動や、学生を対象に「仮囲いデザインコンテスト」を主催するなど、若い人たちに建築に関心を持ってもらう活動に精力的に取り組む、令和元年「秋の叙勲旭日中綬章」を受賞されています。

今後のコロナの状況次第では、昨年同様、物理的に集まるのが困難となる可能性があります。その場合、内藤先生と青柳先生の特別講演につきましては、Webによる開催を予定しております。稲門建築会OBOGおよび学生の皆様、リアル、Webに関わらず、多数のご参加をどうぞよろしくお願い致します。

浅見邦一（事業委員長／苗S62）



合同クラス会 予告

11/6（土）開催予定
昨年はコロナ禍のため開催されませんでした。今年も、早稲田建築合同クラス会2021は開催予定です。

今年（平成6年（1994年）および平成7年（1995年）卒業生が合同幹事となり、現在遠隔会議等にて検討しております。
開催日は理工展に合わせた11月6日（土）予定です。詳細が決まりましたら稲門建築会のメールマガジンなどで報告しますので、しばらくお待ちください。どのような形かは未だわかりませんが、11月にお会いできるのを楽しみにしております。
田中智之（合同クラス会2021実行委員長／苗H06）

主な会務の 報告

二〇二〇年
十月

- 〔会議〕
- Web第2回理事会：10/9
- Web第3回理事会：12/11
- Web第2回職域幹事会：1/29
- Web第2回評議員会：2/12
- Web特別功労賞選考委員会：2/18
- Web企画運営会議：3/12
- 〔活動〕
- Webミニギャラリー：10/28、3/27
- Web秋の大会／合同クラス会：1年延期
- Web芸術展支援：11/2、11/3
- Web近畿支部シンポジウム：11/10
- Web九州支部受賞者の集い：11/28
- WebOBOGによる仕事紹介：11/28
- Web設計製図Ⅱ第1課題、第2課題公開講評会（懇談会中止）
- Web設計製図Ⅲa・1、Ⅲa・2、Ⅲb課題公開講評会（懇談会中止）
- 海外特別見学会（タイ）：中止
- Web新年会：1/29
- 日本建築学会代議員・常議員立候補者支援：2月
- 学部・大学院卒業パーティー（会長祝辞、稲門建築会賞授与）：3/26
- 芸術学校卒業式（副会長祝辞、稲門建築会賞授与）：3/26
- メールマガジンの発行：10、11、12、1、2、3月号
- ニュース110号発行：10/15

報告

早稲田建築アーカイブス完成

早稲田建築アーカイブスについては、早稲田大学建築学科創設100周年記念事業の一つとして、稲門建築会、早稲田大学、早稲田大学芸術学校の共同事業として企画・実施されたものであります。

日本の建築を支えてきた早稲田建築出身の様々な人々の映像・画像・音声の記録・資料を、次世代に引継げるために保存し、主にホームページに公開することを目的としておりますが、この度、60名の建築家の紹介をもって一つの節目を迎えることとなりました。

事務局便り

2020年度の後期は大きなイベントが目白押しでした。Web配信がうまくいくか心配しましたが各委員会の皆様の活躍で乗り切ることができました。近畿支部のシンポジウムでは海外から講演者が参加してITのすごさを見せつけました。今後も活用して稲門建築会活動を盛り上げたいと思います。事務局は12/18に2階から4階に引っ越しました。住所は変わりましたがメールと電話は同じです。遊びに来てください。会費の納入もお願いいたします。
ニュース110号で紹介した支部一覧に誤りがありました。正しくは
信越支部長 新井精一（苗S50）千広建設㈱、北陸支部長 篠島弘男（苗S54）富山県建築設計監理協同組合でした。
鶴田隆（事務局長／苗S48）

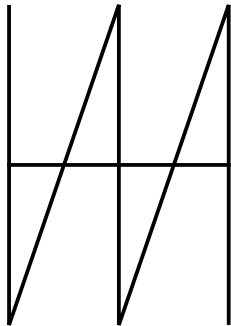
訃報

左記の方がお亡くなりになった旨、事務局にお知らせいただきました。謹んでご冥福をお祈りいたします。
2020年9月1日〜2021年2月28日受付分

- 村木繁三（苗S23）2020.7.7
- 伊藤智之（苗S25）2017.1.3
- 椎名政夫（苗S27）2021.2.14
- 服部義彦（苗S27）2020.8.27
- 木村健二（苗S28）2020.1.19
- 鈴木和夫（苗S28）2020.12.27
- 田嶋道正（苗S28）2013.9.28
- 井上英夫（苗S31）2015.12.24
- 小畑治雄（苗S31）2020.8.28
- 竹山実（苗S31）2020.9.24
- 門脇嘉（苗S31）2016.1.12
- 坂井寿夫（苗S34）2019.4.25
- 中山恵庸（苗S35）2019.11.28
- 松重正彦（苗S35）2020.6.10
- 岩佐総一郎（苗S36）2019.10.22
- 香月謙徹（苗S36）2018.10.23
- 今井肇（苗S37）2019.10.1
- 廣瀬武生（苗S37）2019.年10月
- 高野祐二（苗S40）2018.8.16
- 塚越東男（苗S41）2020.6.27
- 新谷真人（苗S43）2020.年夏
- 岩田克弘（苗S44）2017.9.30
- 広瀬謙（苗S48）2020.8.4
- 森田一郎（苗S48）2010.5.19
- 高島洋一（苗S56）2020.10.9
- 河上信行（苗S57）2020.1.11
- 移川直記（苗S59）2018.1.1
- 芳賀陽一（院H03）2020.6.4
- 大日向實（友S23）2013.年
- 島田耕作（友S27）2019.3.1
- 津海章（友S50）2020.8.2
- 花倉敏秋（友S50）2020.7.27
- 市川清（工S15）2020.8.17
- 袴塚登美男（工S25）2020.7.11
- 小金井康雄（工S26）2020.1.19
- 河合弘（豊S19）2019.12.7
- 小澤次男（豊S23）2018.12.5
- 原壽幸（豊S23）2020.12.8
- 池浦篤（豊S24）2020.1.16
- 榎本勇（豊S24）2020.1.17
- 土谷精一（協S30）2012.10.28

編集後記

今回ニュースで紹介したもののや会務は、コロナ禍の中ほぼWebで発信したものでしたが、特集で組みました「今に息づく早稲田建築」展は、早稲田大学歴史館で現在行われているものです。施設は2018年に開館しましたが、大学卒業生群像の展示として政経、文学の両学部に続き、建築学科が3番目に選ばれたことは光栄だと思えました。我が国で2番目、私学で最初に創設された建築学科の卒業生として、礎となった先人達の展示を皆様に見ていただきたいと思えます。
兒玉謙一郎（広報委員長／苗H02）



News of WASEDA Architecture
No.111
2021年4月15日発行
発行者：稲門建築会会長・大内政男
編集者：稲門建築会広報委員会（委員長：兒玉謙一郎）
発行所：稲門建築会
〒169-8555
東京都新宿区大久保3-4-1
早稲田大学55号館S棟402
電話・ファックス
03-3208-0640
HP = <http://www.tounon.arch.waseda.ac.jp/>
Email = wap@tounon.arch.waseda.ac.jp
制作：株式会社建築メディア研究所
フォーマットデザイン：岡崎真理子
©稲門建築会